
MOON-4 夜叉 2 <1 3>

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 2 <1-3>

【Zコード】

N8594M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

今回の殺人事件が3カ月前の連続通り魔殺人事件と関係があると直感した早坂 充刑事。そして、なんらかの鍵を握っているのが不破和人だと感じた彼は、和人の足跡をたどる・・・

MOONシリーズ 第4弾 夜叉2 第3話です。

3・秀・2(前書き)

原稿をおこつあません(滝汗)。。。来週はつこに月曜休みをとつたぞ!!

その日の午後、早坂 充は青山にある『Office To Office』の事務所を訪れた。3か月前にこここのスタッフの新庄 貴史が例の『連續殺人事件』の被害に遭っている。

当時、新宿警察署で警部を務めていた早坂が初めて連續殺人事件に関与した『事件』の被害者だった。

夏の雲を大空にかざし、

「今日も暑いですねー。」

アイス・「コーヒーを差し出すさやかに、彼は言つた。

「ええ、本当に。」

そう答えるさやかの表情からは、笑顔が消えていた。「今日はどんなご用件で?」

さやかの問いかけに、

「例の『あれ』ですよ。」

ほぼ見当が付いているであろう彼女に、早坂は言った。「今朝方新宿歌舞伎町の派出所であつた『連續殺人事件』。」

「TVで見ました。」

さやかはミーティング・ルームの彼の前の椅子に腰を降ろし、「貴史の時と同じつていうんですか?」

「そう。」

「それで、事情聴取に、また?」

さやかは眉を顰めた。

惇の事件は3カ月前に『終わつて』いるし今更また同じ事を聞きに来たのかという思いが強かつた。「あれ以来、私たちの方では誰も被害者になつてないし、貴史の事は全てあの時、話しましたでしょ?」

「そう。」

そこで、早坂はコーヒーを一口飲み、「今日俺がここに来たのは、

不破和人つていうこここの専属モデルの件。」

「和人の？」

さやかは目を丸くした。「どうして。」

「いやね・・・・・・何か気になつて仕方がないんですよ。」

早坂は前髪をかき上げ、「警察こうちでも不破和人についての情報が少

ない・・・あるとしたら『Office To One』だけ。」

「でも。」

さやかは首を振った。「私たちも和人の事はよく知らないんですよ。秀が何処からか連れて来た人だし。」

「秀・・・・・・というと、こここのチーフの尾崎秀久さん？」

「はい。」

「今何処にいるの。」

「それが・・・・・・」

さやかは困惑の表情で、「3カ月前から何処にいるか連絡も取れなくなつてしまつてる状況です。」

「連絡がとれない？」

早坂はコーヒーをガラス張りのテーブルの上に置いた。「どういう事。」

「私たちも全然判らないんです。」

さやかは正直に答えた。「秀から当分和人は使わないので連絡があつた後、音信普通。彼らのマンションへ行つたけど誰もいないんです。」

「彼ら?一人暮らしじゃなかつたんですか?」

「ええ。マスコミには公表してませんけど、秀は和人と朝子さん、それと裕希くんつていう少年と一緒に大京町のマンションで暮らしてたんです。」

「そうなの。」

早坂は胸元から黒い手帳を取り出し、メモを始めた。「尾崎秀久つて言つたら、フリーの時から有名なカメラマンでしたよね。」

「ええ。」

「さやかさんは和人の事は？」

「よく知らないです。秀がある日突然連れて来た人だから - - - でも、いいモデルです。」

「朝子さんつて？」

「そのマンションの持ち主です。これも何処で秀が彼女と知り合つたかは判りません。秀は最初、事務所で寝泊まりするか時折中野にある自宅のマンションへ帰るか、そんな生活してたし。」

「それで、どういう経緯か知らないけど朝子つていう人と尾崎さんが知り合い・・・・・それに和人つていう人が加わつたと。」

「そうです。」

「あと、その裕希くんつて子は？」

「和人の親戚みたいでしたよ、17歳の有名高校の寮にいたつていう・・・・・」

「ちょっと、待つて。」

早坂は彼女の言葉を少し制した。

そして、手帳を数ページめぐり、1枚の写真を取り出す。「もしかして、裕希とかいう子つてこの子？」

彼は彼女に写真を向けると、

「あ！ 裕希くん、この子。」

と驚いた様に答えた。「何で刑事さんが？」

「・・・・・成程ね。」

早坂の中で『何か』が繋がつた事にさやかは気付く由もない。

「裕希くんも行方不明なんですか？」

さやかは問い合わせた。「どうして突然、皆いなくなつたんですか？」

？」

「理由は判りませんが」

早坂は写真と手帳を戻し、「裕希くんはあの篠原財閥の御曹司なんですよ。八王子にある学校の寮を飛び出してから行方不明 - - - お父さんからの捜索願いも出てた。そんな彼がどうして尾崎さんや和人たちと一緒にいたか。」

「 そうなの？」

さやかは驚いて手を口元にあてた。「 篠原財閥の？ てっきり和人の言ひ通り、彼の親戚だと思ってたわ。」

「 その和人さんなんですか？」

と、早坂は目を細め、「 本当に身元も判らないんですか？ 何処に住んでいたとか、よく行く場所とか。」

「 本当に私たちも和人の事は判らないんです。秀が出逢った時は既に朝子さんと和人は一緒に暮らしていたし……裕希くんも2年前位から和人の所で暮らす様になつたとか、それくらいしか。」

「 そうですか。」

早坂はアイス・「 ハービーを飲み干し、「 お邪魔しました。今日はこれくらいで。」

席を立つ。

「 待つて下さい！」

出口へと向かう早坂に向かつてさやかは、

「 裕希くんは今どうしてるんですか？」

「 成城にある実家に戻つてますよ。」

早坂は微笑した。「 でも、『 彼ら』 と離れ離れになつたのが相当ショックらしい。」

「 そう・・・・・・」

さやかは頷いた。早坂の手がドア・ノブにかかる。

「 これから裕希くんの家に行きますよ。」

彼はそう言った。そして、

「 もう一点。」

ドアの前で振り返り、「 新庄貴史さんの『 事件』 の時、現場に彼 - - - 不破和人がいたんです。」

「 え・・・・・・」

「 それだけは、俺、忘れてません。」

彼は窓の向こうに広がる青空を見つめ、

「 一度、奴を見たら忘れる訳ないでしょ。」

そうさやかに告げた。「じゃ、これで。」

バタン・・・・・

扉が閉じられた。

12階建てのビルの7階に入るオフィスを後にしてエレベーターへと緑色の絨毯が引かれた廊下を歩く。

「忘れる訳ないよなー。」

早坂は三ヶ月前の当時を振り返り、「碧色の瞳・・・・・・・・・。

そして、篠原財閥の御曹司の行方不明事件。」

チン・・・・・

エレベーターが来た。

「不破和人が行方不明つてことは、もしかしたら裕希くんが何かを知ってるかも。」

心の中で、繫がつた『謎解き』の鍵を握るのは篠原裕希かもしれない・・・・・・

早坂は雨の中、一人で歩いていた彼の事を思い起こした。まるで、何もかも失ってしまった様な無表情の少年の姿が早坂の脳裏にしみついて離れない。

(不破和人、尾崎秀久、朝子、篠原裕希。)

無人のエレベーターに乗り込む。

「そして今回の連続殺人事件。」

早坂は顎に手をやり、「繫がつてゐる・・・・・・きつと、俺たちの知らない世界で。」

警察官としての『カン』だった。

『本当にすつてば！彼の瞳は碧色で誰が見ても一度見たら忘れられない奴ですよ。』

その日早坂は他に起きた事件の捜査にあたらなければならなくな
り、成城にある裕希の家を訪れたのは翌日だった。

第二土曜日、学校が休みの日である。

ピーン ポーン

玄関のチャイムの音は、2階にいる裕希と市子にも聞こえてきた。

「お客様かな？」

裕希はチエスの駒を置き、木製のドアを見つめた。

すると程なく、

「コン コン

扉を叩く音。

開けるとそこには執事の笠がいた。

「裕希様。警察の方がいらっしゃいます。」

「警察？」

裕希は小首を傾げた。

心当たりがない。

しかし、

「市子叔母さん。俺、行つてくれる。」

「そうだの。」

市子は答えた。

木製の螺旋階段を降り、リビングへと向かつ。

そこには、

「お久しぶり、篠原裕希くん。」

グレーのスーツを着た早坂 充の姿があつた。

「あ！」

裕希は微笑む彼に見覚えがあつた。

『篠原家の御曹司がこんな所で何してるの。随分前から君のお父さんが捜して欲しいって依頼に来ていたんだよ。』

あの日、『闇の光』の洪水の後、突如降り出した激しい雨の中、一人西新宿の甲州街道を歩いていた裕希を『保護』した警察官だった。

田を丸くする裕希に、

「改めて、早坂 充っていうの。今はもう青少年課じゃなくて刑事さんになっちゃったけどね。」

「早坂・・・・・・さん。」

裕希は呟いた。「どうしてここに？」

「いや、大した用じゃないんだ。あれからどうしたかと思つてね。」

「

「そり。」

そこへ、

「どうやら裕希のお客人らしいの。」

背後から声が聞こえた。

「早坂殿。裕希が世話をかけたそうじゃな。」

艶やかに微笑み、「礼を申す。この子の父 雅人に代わって。」「こ、こちらこそ。」

彼は市子の美しさに驚きながら、「早坂 充刑事です。」

懐から取り出した手帳を見せ、「新宿警察署に勤務しています。特捜一課です。」

「存じてあるよ。」

市子は意味ありげにそう言い、「そ。裕希も早坂殿も腰を降ろしなされ。今、飲み物を持って来る故。」

「『殿』はよして下さい。」

早坂は両手を振り、「早坂『刑事』で十分です。」

「では、早坂刑事。」

市子は、「裕希をよろしく頼むぞえ。」

そう言い、扉の向こうへ消えた。

「綺麗な人だねー、裕希くん。」

彼女の去った後をじっと見つめたまま、

「どうこう関係？」

「叔母さんだよ。父さんの10違いのお姉さん。」

「へえ・・・・・そうすると・・・あれ？」

早坂にもどう見ても市子が20代に見える。

「40・・・・・な訳ないよな？」

裕希は早坂の前で初めて笑った。

「みんなそう言つよ。俺の父さんもまだ20代に見られるし・・・どうしてか判らないけど父さんの血筋の方は成長しても若く見えるみたい。」

「まるで吸血鬼だな、歳をとらないなんて。」

「・・・・・」

裕希はふいに口をつぐんだ。

そんな彼の雰囲気に気付き、

「どうかしたのか？ 裕希くん。」

「・・・・・うん。」

軽く頭を振り、「早坂さん。今日は何の用でここに来たの？」

「君の辛い思い出を思い出させる事になるかもしないけど、ちよつと聞きたい事があつてね。」

穏やかな口調で早坂はそう切り出した。

「三か月前まで続いた連続通り魔事件の時、裕希くん、新宿のマソシヨンで暮らしてたらしいね・・・『Office To On e』の不破和人や尾崎秀久と一緒に。」

「どうしてそれを・・・・・？」

「昨日、青山のオフィスに行ってね。」

問い合わせる裕希に答える早坂。「そして3カ月前・・・・・・

つまり君を僕たちが保護した時、それを境に皆姿を消してしまった。

「・・・・・」

「裕希くんならあの事件や今回の事件と、不破和人との関係を知つてるんじゃないかと思つて。」

「和人は関係ない！」

裕希は激しく否定し、「和人は逆に - - - と叫んで慌てて口を噤む。

（相手は普通の人。『闇』の存在なんか市子叔母さんみたいに信じてはくれない。）

早坂から顔を背け、左手の親指を軽く噛む。

（和人は逆にその『通り魔』を『狩る』側だつた・・・・・・・・確かに事件に関与してたけどそれをどう説明できる？）

裕希は思案した。

そんな裕希を見て、

「やつぱり何か知つてそうだね。」

早坂は言った。

「・・・・・・・・

「そう矢継ぎ早に責め立てては尋問じやぞ、早坂刑事。」

そんな気まずい2人の雰囲気を破るかの様に3人分のコーヒーをトレイに乗せた市子が姿を現した。

「いや、これは - - - 」

と、どもりながら早坂は、「すまないね、裕希くん。3ヶ月ぶりにまた同じ事件が起こってしまったからね。」

裕希に謝る。「俺はあの時青少年課だつたから『Office To One』の新庄貴史の事件以外は直接関与していないんだ。しかし、今度は違う。俺の所轄内での『事件』なんだ。これ以上、犠牲者を出す訳にはいかない - - - 何か、知つてる事があつたら教えて欲しいんだ。」

その問いかけに答えたのは、裕希ではなく市子の方だった。

「早坂殿。」

その切れ長の目を細め、「そなたも前回の事件や今回の事件、尋常のものとは思っていないであります。」

「確かに。」

早坂は素直に答えた。「『何か』がひつかかる・・・・・それが、今の俺には不破和人という存在なんです。」

「人は」

「コーヒーを彼の目の前に差し出し、その顔を覗き込む様にして、「『光』の下で生きる、その命の夢さ故に『時』が定めたもの。」

「・・・・・」

魅入られる・・・その紅を帯びた黒曜石の瞳。

「『永遠』^{といしえ}を生きる者には『闇』を。」

「『闇』・・・・・」

碧色の瞳を持つ、一人の青年の姿が脳裏に甦る。

（そう・・・あの時、俺も『やられる』はずだった。）

記憶が、時間が、動き出す・・・

偶然だった。

青少年課に配属されていた早坂の主な任務は家出少年たちの捜索と夜の『新宿』を遊行する未成年者の取り締まり。

それは、深夜だった。

新宿公園を巡回中の彼の前に、誰かが横たわっていた。場所が場所だけに最初は酔っ払いかホーム・レスかだと思った。

「もしもし」

声をかける。自転車から降り懐中電灯で『彼』を照らすと、

「こいつは・・・・・」

直観的に判つた。今、所轄内で満月を中心として起こっている謎の連續通り魔事件の仕業だと。

何故なら、偶然照らした首筋から長い血が地面に向かつて垂れていたから。

すぐに署に連絡しようと、腰の無線機に手をやる・・・が、その

手を誰かが掴んだ。

「…………」

振り返る。

そこには、翡翠色の瞳を持つ端正な顔立ちの青年。

（こいつが、犯人か！）

早坂は、相手に回し蹴りを入れようとしたが、

バツ・・・・・

長身の青年は黒いコートを翻して、天空高く舞い上がった。すかさず、銃をとる。

刹那。

周囲に紅の瞳が浮かび上がった。

（何？）

早坂は一瞬、誰に向かつて発砲したらしいか判らなかつた。全国の射撃大会で常にトップの座を勝ち取つていた彼。その隙をついて、紅の瞳が一気に早坂へと向かつて来た。

（何者だ、こいつら！）

早坂は気を取り直して紅の瞳めがけて銃を放つた。

バンッ バンッ バンッ

命中・・・したはずだった。

だが、相手は怯むことなく起き上がりつて彼を天空から地上から襲つてくる。

早坂は身を翻して、背後の『犯人』を狙つた。

（命中してゐるはずなのに・・・・・・）

32口径の銃の弾丸はあと3発。

紅の瞳が、

「血を・・・・・・」

「命の糧。」

（何を言つてゐんだ、こいつらは。）

その時、

ドンッ・・・・・・

後頭部に激痛が走つた。

「え・・・・・・」

バランスを崩す早坂。

（やられる！）

そう思つた瞬間。

自分の身は宙に舞つていた。

意識を失いつつも、必死に目をこらす。

最後に視界に入つたのは、つい先ほどみた碧眼の青年の姿。

「『光』と『闇』の境界線を越えてはいけない。」

よく澄んだ声で青年はそう言つた。

間もなく、地上に着地し早坂を横たえると青年は紅の瞳に向かつて走つて行つた。

そう。

犯人は『彼』ではない。

『彼』はその連續通り魔事件の人知では計り知れない世界の者を『狩る』者。

最後に目に残つたのは、青白い炎を左手に宿し、次々と紅の瞳を持つ『何者』かを『闇』に葬る彼の後ろ姿。

「早坂さん。」

裕希の声に早坂は『現実』に引き戻されていた。「どうしたの？」

「いや・・・・・・」

思い出した『記憶』。

人間の早坂にはどう説明したらいいか判らない。ただ、あの時最

後に紅の瞳が『帝王』と青年を呼んだ事だけが記憶に残っている。

「忘れてただけ。」

早坂は裕希に言った。『繫がつたよ。不破和人と通り魔殺人事件の件。』

「え？ 何、どうして。」

裕希が驚く。

早坂は正直に話した。

「俺も不破和人に助けられた側だから。」

「早坂さん、和人の事・・・・・・」

「信じられないけどね、吸血鬼だの『闇』だの。」

「うん。」

裕希はその言葉に力強く頷き、

「だけど、和人は新宿に結界を張つて、守つてる。もう一人の、和人に倒された『帝王』九桜の側が起こす、連續殺人事件をせめて新宿内だけにしよう。」

「ようやく思い出したようだの、早坂殿。」

「・・・・・『刑事』です。」

市子の言葉に早坂はぼつりと言つた。

「新宿中の『闇』がまた動き出している。」

彼女は言った。『そのうち裕希にもその手が伸びるだろ？』

「そうですね。』

早坂は頷いた。

それを見届けると、市子は、

『早坂刑事に裕希のボディ・ガードを頼みたい。いつ、何処からか襲つてくるかもしれない『闇』の者の手。』

『判りました。』

早坂は強く頷いた。

それを見届け、市子は、

『ライフルが得意であったの、早坂刑事は。』

『ええ、一応全国大会でも何度も優勝してますし、オリンピック

に出た事もあります。」「心強い。」

朝子は微笑した。「ならば、助言いたそう。相手は得体の知れぬ者 - - - 狙うならば、」

と、自分の額を指示し、

「銀の弾丸で、ただ一度の勝負 - - - 逃すではないぞ。」

「市子叔母さん・・・・・・・・」

裕希は彼女を見上げた。

市子は立つたまま悠然と満足気に微笑んでいる。

「裕希。早坂刑事は必ずお前の力となるだろう。お前もそれを覚悟してあやつらと闘わなければならぬぞ。」「

「うん!」

「一ヒー・カップを握りしめ、「俺、絶対負けない。和人と秀さんと朝子さんを守つてみせる。」

いつの間にか、少年は大人へと成長していた。

それは、守りたいものがあるから。

大切な人がいるから。

だから - - - 闘う。

例え、相手が『闇』の力を持つものでも。

「裕希くん。」

早坂は微笑んで言った。「何だかんだ言って、いい情報をもられて助かつたよ。所轄内の警察官にも - - - 吸血鬼ヴァンパイアの話は信じないと思うけど、出来るだけ俺も警備を固めるよ。」「

と、市子の真似をし自分の額を指差し、

「仕留める時は、一撃で。」

太陽は、もう天空高く夏の日射しと暑さを伴い遙か彼方に浮かんでいた。

3・秀-2(後書き)

タバコが吸いたい。
。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8594m/>

MOON-4 夜叉 2 <13>

2010年10月8日22時30分発行